The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山片蟠桃『夢ノ代』経論篇訳注（二）
Author(s)	岸田, 知子
Citation	懐徳堂研究. 2013, 4, p. 67-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山片蟠桃『夢ノ代』経論篇訳注（二）

岸田知子

一、テキストは、関西大学図書館所蔵写本を底本とし、これに句読点等を施した日本思想大系（岩波書店）本を参照した。
一、漢字は常用漢字を用いた。
一、コト、ドモ、シテを記す記号はカナ表記に改めた。
一、送り仮名・振り仮名のうち片仮名は底本による。平仮名は訳注者が施した。
一、底本の欄外書き込みは（欄外：）として該当箇所に挿入した。
一、「　」は底本では章末にある。別本に拠るものと思われる。岩波本に従って本文中に挿入した。
一、各章のタイトルは訳注者がつけた。なお、注はなるべくわかりやすく詳しく書いた。
（『中国研究集刊』に連載中の「『夢ノ代』雑書篇訳注」に合わせて、凡例を少々改めた。）

九、月令篇について

月令①ノ書ハ呂不韋②ノ作ト云説アリ。何ノ為ニ作リタルヤ怪シムヘシ。四季ヲ以テ五行ニ配シテ、行ツマリテ、土用ヲ立テ、中央土トシ、黄トス。ソノ月令、タトヘバ孟春トイヘドモ③、青竜ニ騎サルナリ。古ヘニ在ザルナリ④。鑾輅ニ乗ザルナリ。青旂ヲ載サルナリ。蒼玉ヲ服セザルナリ。麦ト羊トヲ食ザルナリ。況ヤソノ余ヲヤ。コレ空論空礼ニシテ云ニタラズ。ミナ捧腹⑤スベシ。

【注】

①『礼記』に月令篇がある。十二ヶ月の気候とその月々に行う政令とを記したもの。いわゆる年中行事である。もと秦の呂不韋が『周書』七十一篇中の第五十三篇に基

づいて集めたもので、漢に至って『礼記』に入れられたといわれる。

②秦の荘襄王と始皇帝に仕えた。編著に『呂氏春秋』がある。

③『礼記』月令「孟春之月」に「天子居青陽左个、乗鸞路、駕倉龍、載青旂、衣青衣、服倉玉、食麦与羊（天子青陽左个に居りて、鸞路に乗り、倉龍に駕し、青旂を載せ、青衣を衣て、倉玉を服し、麦と羊とを食す）」とある。青陽は天子の東堂（東の御殿）。鸞路は虞舜の車。倉は蒼と同じ。旂は旗。

④岩波本では「右［个ニ］在ザルナリ」。「左个」とあるべきところを「右个」に誤り、さらに「古ヘ」と書き誤ったのであろう。

⑤腹をかかえて大笑いする。抱腹と書くのは誤用による慣用。

【現代語訳】

月令の書は呂不韋の作という説があるが、何のために作ったのか怪しむべきである。四季を五行に配し、行きづまって、土用を立て、中央を土とし、黄としている。その月令に照らし合わすと、たとえば孟春といっても、青い竜に騎乗なぞしない。東の宮殿の左に居るわけではない。舜の車である鸞輅に乗らない。青い旗を建てない。青い玉を身につけない。麦と羊とを食べない。まして、その他においては言うまでもない。これは実体のない空論空礼であって、いうほどのことでもない。どれも笑いとばすべきことである。

十、幼児教育

「幼子常視レ勿ヲ誑①」。コノ語多ク「視ス誑コトナカレ」トヨムハアシ、。「誑コトナキヲ視ス」トヨムベシ。意親切②ナリ。昔大姙③ノ文王ヲ教育スルヤ、胎中ヨリコレヲヲシヘ、食スレバ教ヘ、言ヘハヲシヘ、歩スレバヲシヘ、行ヘバヲシユ。行住坐臥④ヲシヘニアラザルハナシ。ユヘニヨク聖徳ヲナス。シカルニ今ノ幼子ヲ粮育スルヤ、父母ヲ始メトシテ、親戚婢妾⑤ツ子ニ愛ニ溺レテコレヲ弄玩⑥シ、不正・淫行⑦ノコトノミヲヲシヘ、或ハ戯ノアマリニ有ヲ以テ無ト云、無ヲ以テ有ト云、淫芸・妖術ノ域ニ遊行シ、劇場散楽⑧ニ泥ミ⑨、仏ヲ礼シ、鬼神⑩ヲ狎侮⑪ス。八九歳ヨリシテ後、少シキ心アル父母ハ、学ヲス、メ礼義ヲ習ハストイヘドモ、先入主⑫トナリテ淫戯涵養⑬シテ、ソノ垢ヲ去コトアタハズ。タトヒ賢ニシテ学ブトイヘドモ、先入ノ垢ヲ去ルノ功労⑭ニ

日経テ、大儒トナルコトアタハズ。コレミナ後世ノ子ヲ育スルノ難ニシテ、真儒ノナラザルヤ、ムベナリ。唯文王ノゴトクスルコトアタハズトモ、幼ヨリ育クムニ先ハ誑コトナキヨリシメスベシ。然レバ旧染ノ垢少クシテ、早ク切磋琢磨⑮ノ功ニカ、ルベシ。只始ヨリ垢付ノ少キヲ希フノミ。

【注】

①『礼記』曲礼篇。

②ぴったりあてはまること。

③周の文王の母、太任。

④行くととまると、すわるとふすと。日常の起居動作。

⑤婢妾は下女。召使いの女性。

⑥もてあそぶ。なぐさみにする。

⑦度を過ごした行ない。正しくない行ない。

⑧散楽は中国古代の芸能の一つ。雅楽に対して民間の舞楽。唐代、転じて軽業・奇術・滑稽・物まねに音楽をともなった雑多な芸能をいう。奈良時代に日本に輸入され、平安時代に盛行。転訛して「さるがく」とも呼ばれ、田楽や猿楽などに受け継がれた。鎌倉時代に入って演劇化し、能と狂言となる。ここでは雑多な芸能をいう。

⑨拘泥する。執着する。

⑩死者の霊魂。

⑪なれなれしくし、あなどる。岩波本頭注「底本・諸本多く誤写。A本により訂正」。

⑫先に聞いた考えに支配されること。

⑬涵養は自然に水がしみこむように徐々に養い育てること。

⑭てがらと骨折り。ここは苦労と同義か。

⑮切は獣骨や象牙を切る。磋はそれをみがく。琢は玉や石を刻んで形をつける。磨はそれをみがく。転じて、自分自身で、あるいは友人同士で学問や人格の向上を目指して努力すること。『詩経』衛風淇奥「如切如磋、如琢如磨」に基づく。

【現代語訳】

「幼子常視勿誑」。この語はよく「視すに誑くことなかれ」と読まれているが、これはよくない。「誑くことなきを視す」と読まなければならない。そう読めば意味がぴったりあてはまる。昔、大姙が我が子文王を教育するにあたって、胎中にいるときから教え、食べ始めたら教え、ものを言えば教え、歩きだしたら教え、何かを行えば教えた。行住坐臥のすべてにおいて教えないことはなかった。故に文王は聖徳をなしえたのである。

しかし、今、幼児を養育するにおいては、父母を始めとして、親戚や下女たちがいつも溺愛してこの子を弄び、不正や淫らな行ないだけを教え、時には戯れのあまり、有ることを無いといったり、無いことを有るといったり、淫らな芸や妖しげな術をおこなう所に遊行し、劇場や芸能に馴染み、仏に礼拝したり、鬼神をなめてかかったりする。

八、九歳以後は、少し心ある父母は、学を勧め礼義を習わせるけれども、先に身に付いたことが先入主となって淫らな遊びにふけって、その垢を取り去ることができない。たとえ、その子が賢くて学問をしたとしても、先入の垢を取り去る苦労に日を費やして、大儒となることができない。これはみな後世において子供を育てる際の困難な点であって、真儒が育たないのは当然である。

ただ文王のようにすることができないとしても、幼時より育くむのに先ずは正しいことを示すべきである。そうすると、幼時より染まる垢も少くなり、早く自らを切磋琢磨してその功を得ることができるだろう。とにかく始めから垢の付き方が少ないことを望むのみである。

十一、『詩経』の詩は最初から三百篇

前儒云、「詩①ハ古昔ソノ数多シ。孔子コレヲ削リテ三百②トス」云③。モシ孔子コレヲ刪(ケツ)リ玉ハヾ、ナンゾ鄭衛(テイエイ)ノ淫詩(インシ)④ヲ刪ラサルヤ。コノ詩、後世ノ戒禁(カイキン)ノ為ニ残シ玉フト、回護(クワイゴ)ノ論ヲナスハ僻説(ヘキセツ)ナリ。シカレハスベテ刪ルニ及バサルナリ。コノ二風⑤ノ内ニモ、衛ニハ半ハ見ルベキアリ。鄭ハ少シ。コノ詩ヲ存スルヲミレバ、詩経ハ古ノマヽニテ、孔子ノ聖手ヲ入サセタマヒタルニハアラザルナリ。論語中ニ「誦二詩三百一(ヲ)⑥」「詩三百、一言以蔽(ヨフフ)レ之(ヲ)⑦」ノルイヲ以テミレバ、詩三百ト云数ハ古語ニシテ、孔子シバ〳〵コレヲノ玉フモノナラン。孔子自カラ刪リテ、吾(ワガ)刪リタルノコリノ詩三百トハノ玉フマジキナリ。コレヲ以テミレハ孔子ノ刪リ玉ハサルコト明ラカナリ。

【注】

①中国古代の黄河流域地方の歌謡を詩といい、詩を集めたのが『詩（経）』である。

②孔子が詩を選定して三百篇にしたといわれる。現行の『詩経』は三百十一篇である（うち六篇は題名のみ残る）。

③『史記』孔子世家に「古者詩三千余篇、及至孔子、去其重、取可施於礼義、〔中略〕三百五篇、孔子皆弦歌之（古は詩三千余篇、孔子に至るに及び、其の重なるを去り、礼義に施すべきを取れり。〔中略〕三百五篇、孔子皆なこれを弦歌す。）」とある。

④『詩経』国風の鄭風と衛風の詩を指す。『論語』衛霊公篇に「鄭声淫（鄭声は淫）」、陽貨篇に「悪鄭声之乱雅楽（鄭声の雅楽を乱すを悪む）」、『礼記』楽記篇に「鄭衛之音、乱世之音也（鄭・衛の音は乱世の音なり）」とある。

⑤『詩経』国風の鄭風と衛風をいう。

⑥『論語』子路篇。

⑦『論語』為政篇。

【現代語訳】

先輩の儒者たちは、「詩は大昔は数が多かった。孔子がこれを削って三百篇にした」という。もし孔子がこれをお削りになったのならば、どうして鄭・衛の淫らな詩を削らなかったのだろうか。この鄭や衛の詩は、後世の人を戒しめるためにお残しになったと、弁護の論をなすのはこじつけである。戒めのために残したとすれば、すべての詩を削るに及ばない。この二つの国風の内でも、衛風には半分は見るべきものがある。鄭風には少ない。これらの詩を残しているのをみると、『詩経』は昔のままで、孔子の聖なる手をお入れになったのではないのである。『論語』の中に「詩三百を誦す」「詩三百、一言以て之を蔽う」の類の語があるのを見ると、詩三百の三百という数は古くからある語であるから、孔子はしばしばこの言葉を口にしておられるのであろう。孔子が自ら削って、私が削った残りの詩三百とは決して言っておられない。このことからみると孔子が削られたのではないことは明らかである。

十二、『四書集註』について

朱子①四書ノ序、大学・中庸ハ作文ニシテ、論語・孟子ハ序説トシテ史記ノ文ヲヨビ古説ヲノベテ文ヲ作ラズ②。コレ孔孟ノ書ニ序ヲ作ルコトヲ謙退（ケンタイ）シテ、アヘテ当ラズトスル処、後世ニアリテ、何ホド博識（ハクシキ）ナル大儒ト云ヘドモ、コノ謙譲（ケンジャウ）ニハ及ブベカラズ。コノ一事ヲ以テモ朱子ノ為（なり）レ人ヲシルベキナリ。又朱喜③章句、朱喜集註トアルハ疑フベシ。朱子註ヲ作レルハ、朋友・門人中ニ行フ書ナリ。奏本④ニアラズ。別ニ姓名ヲ題（ダイ）スルニ及ハズ。大学章句、論語集注トバカリニテ、上ニテ書ツヾ

ケテ、下ニ朱喜章句、朱喜集註ト書コトハアルマジキナリ。明ノ初、大全⑤ヲ纂ス。コノ書大ニ行レテ、集註ノ本ハ亡ビタリ。大全ハ勅撰⑥ナレバ撰者ノ名ヲ題ス。故ニ朱喜集註ト題シテ大全ノ撰者ニ連タルナリ。是モアルベキコト也。凡勅撰ノ註書ミナシカリ。三国志・世説ノルイ⑦証スベシ。ソノ後、大全ヲ厭フテ集注バカリノ本出タリ。此トキ大全ノ本ニ就テ小註ヲ除キタルモノナレバ、本書ノ旧面目ヲ失ヒタルコト多シ。朱喜集註ト下ニアルハ、大全ヲ写タルモノニシテ旧ニアラズ。注ハ一字下ゲテ、字ノ大サ本文ト同ジコトニテ、分注⑧ニアラズ。今分註スルハ旧キニアラズ。又大全ノ通リニモアラズ。コレハ只紙ヲ吝ムニ始マルトミエタリ。論語・孟子ニ、巻ノ一二皆旧ニアラズ。大学篇首ニ分注シテ「大旧音泰」云々⑨、中庸ノ分註「中者不偏」云云⑩、皆大全ノ刪リノコリナリ。中庸・大学ノ始ニ「子程子曰」⑪ハ常ノ注ナリ。「右経一章」ノ下、又「右伝幾章」⑫ノ下、中庸「右第幾章」⑬ノ下、ミナ朱子ノ常ノ註ニシテ、カハルコトナキヲ、コレラバカリヲ大書シテ常ノ分註ト別ニナシタルコト、大全ヨリ集註ニ写シタル寸ノ削ノコリナリトシルベシ。コレラノルイ五経⑭ニモ多クアリ。今改ルナラバソレゾレ改タキカ。後世ニ書改ムル寸ハ、熹ノ字書ベカラズ。子トスベシ。シカレドモコレモ大学章句、論語集注ト上ニテ書ツヽケル寸ハ、朱子ヲ書ニ及バズ。孟子ノ書ハ趙岐⑮ノ古註アリ。コノ寸章句トス。シカルニ大学・中庸ハ一章ツヽ、章ヲ分ツユヘニ章句ト云。論語・孟子ハ一篇ノ内数章アレバ章句トハ云ベカラズ。ユヘニ論語章句トイハズ。孟子ニアリテ「梁恵王章句上下」トス。アヤシムベシ。又コノ上下ト分ツモイラサルコトナリ。コノ章句ハ趙岐本ノ削リノコリガ。又ハ大全ノ寸ノアヤマリナルベシ。古説、論語二十篇・孟子七篇トナレバ、ソノマヽナルベシ。論語ニテハ二篇ヅヽ合セ、孟子ニテハ一篇ヲ二篇ニ分ツ。大全ニテハ丁数⑯ニトルユヘ分ツコトモアルベシ。スデニ集注ニテハ数篇ヲ合セテ合巻トス⑰。ナンゾ分ツコトノアラン。

【注】

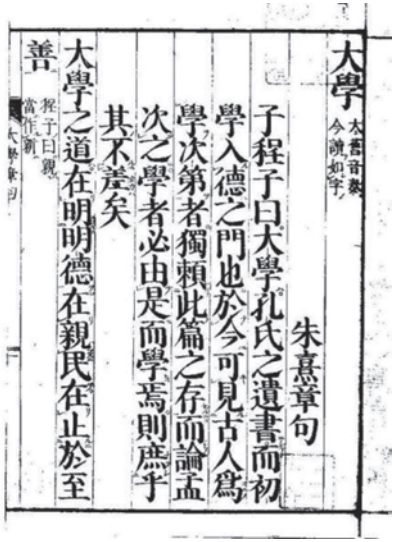
①朱熹。南宋の人。宋学の大成者。その学を朱子学という（一一三〇～一二〇〇）。

②四書は『論語』『孟子』『大学』『中庸』をいう。朱子が重んじて新注を加えた。その『大学章句』と『中庸章句』の序は朱子の作った文であるが、『論語集註』と『孟子集註』の場合は「序説」として『史記』などの先人の文を載せている。

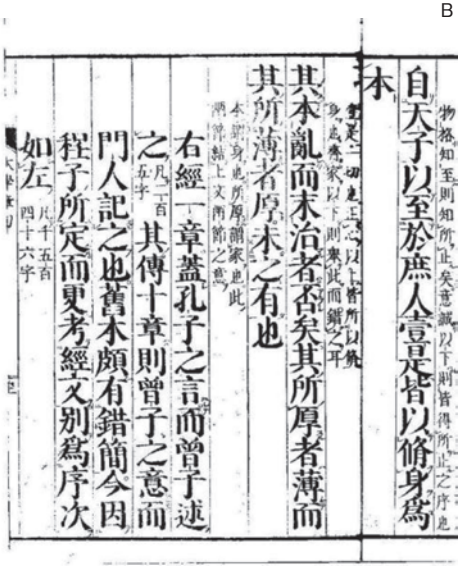
③朱子の名は熹であるが、この底本では喜と書いている

ことが多い。
④朝廷に奉る本。
⑤『四書大全』。明・永楽年間、胡広等奉勅撰。
⑥勅命を受けて作られた書物。
⑦『三国志』は晋・陳寿撰。南朝宋・裴松之奉勅注。『世説新語』は南朝宋・劉義慶撰。梁・劉孝標注。
⑧割注（わり）のこと。
⑨『大学章句』の題字の割注に「大旧音泰、今読如字」とある（図版A）。
⑩『中庸章句』の題字の割注に「中者不偏不倚、無過及之名、庸、平常也」とある。
⑪子程子は北宋の程明道と程伊川をいう。『中庸章句』『大学章句』の冒頭に本文の二字下がりで「子程子曰云々」とあるをいう（図版A）。
⑫『大学章句』の第一章の終わりに三字下がりで「右経一章云々」とあり、以下章ごとに同様に「右伝幾章云々」とあるをいう（図版B）。
⑬『中庸章句』の本文の章ごとに「右第幾章云々」とあるをいう。
⑭『五経大全』をいう。
⑮後漢の人。『孟子』の注を書いた。
⑯「丁数」は「偶数」。「『大全』では偶数になるから」

A


大學 太舊音泰 今讀如字
朱熹章句
子程子曰大學孔氏之遺書而初學入德之門也於今可見古人爲學次第者獨賴此篇之存而論孟次之學者必由是而學焉則庶乎其不差矣
大學之道在明明德在親民在止於至善
程子曰親當作新

B


物格知至則知所止矣意誠以下則皆得所止之序也
自天子以至於庶人壹是皆以脩身爲本
壹是一切也正心以上皆所以脩身也齊家以下則衆此而錯之耳
其本亂而末治者否矣其所厚者薄而其所薄者厚未之有也
本謂身也所厚謂家也此兩節結上文兩節之意
右經一章蓋孔子之言而曾子述之凡二百五字其傳十章則曾子之意而門人記之也舊本頗有錯簡今因程子所定而更考經文別爲序次如左凡千五百四十六字

というのは『孟子』七篇を偶数冊数にするためととるべきか。『四書大全』の『孟子』は、第一冊に「梁恵王章句上・下」「公孫丑章句上」の三篇、第二冊に「公孫丑章句下」「滕文公章句上・下」を収め、第三冊は「離婁篇章句上・下」、第四冊は「万章章句上・下」、第五冊は「告子章句上・下」、第六冊は「尽心章句上・下」となっている。

⑰『孟子集註』では巻一が「梁恵王章句上・下」、以下巻七までそれぞれ上下二篇を収めている。

【現代語訳】

朱子の四書の序のうち、『大学』『中庸』は朱子の作文であり、『論語』『孟子』は「序説」として『史記』の文や古説を述べて、自身の文を作っていない。これは孔孟の書に序を作ることを遠慮して、あえて作っていないのであって、後世のいかに博識な大儒といっても、この謙譲ぶりには及ぶことはできない。この一事をもって朱子の人柄を知ることができる。

また、(『大学章句』『中庸章句』に)「朱熹章句」、(『論語集註』『孟子集註』に)「朱熹集註」と書いてあるのは疑問である。朱子が註をつけたのは、朋友や門人に向けての書であって、奏上本ではない。だから別に姓名を書き付けるには及ばない。『大学章句』『論語集註』とだけでよく、上に書き続けて下に「朱熹章句」「朱熹集註」と書くことはあってはならない。

明の初め、『四書大全』が編纂された。この書は大いに行われ、集註本は用いられなくなった。『四書大全』は勅撰なので撰者の名を書く。だから「朱熹集註」と書いて『四書大全』の撰者に連ねたのである。これもありうることである。すべて勅撰の註書はみなそうである。『三国志』や『世説新語』の類がこれを証明している。その後、『四書大全』を嫌って、集註だけの本が出た。この時の本は、『四書大全』の本にもとづいて小註を除いたものなので、本書の元の面目を失っていることが多い。「朱熹集註」と下にあるのは、『四書大全』を写したもので、元にはなかった。

註は一字下げて、字の大きさは本文と同じであって、割り註ではない。今、割り註にしているのは元の本ではなく、また、『四書大全』の通りでもない。これは、ただ紙を惜しんで始めたと思われる。『論語』『孟子』については、巻一と二は、すべて元の本ではない。『大学』の篇首に割り註して、「大旧音泰」云々というのや、『中庸』の割り註「中者不偏」云々は、どれも『四書大全』の削り残りである。

『中庸』『大学』の始めに「子程子曰」というのは通常の註である。「右経一章」の下、又「右伝幾章」の下、『中庸』「右第幾章」の下、みな朱子の通常の註であって、変わっていないのを、これだけを大きく書いて通常の割り註とは別にしてあるのは、『四書大全』から集註に写したときの刪り残りと知ることができる。

これらの類は『五経大全』にも多く見られる。今、改められるならば、それぞれ改めたいものである。後世に書き改めるときは、「熹」の字を書いてはいけない。「子」とすべきである。しかし、これも『大学章句』『論語集註』と上にあるのに続けて書くときは、朱子を書くには及ばない。

『孟子』の書は趙岐の古註がある。このとき「章句」とした。しかし、『大学』『中庸』は一章づつ章を分けているので「章句」という。『論語』『孟子』は一篇の内に数章あるので章句とはいえない。だから論語章句とはいわない。『孟子』の場合、「梁恵王章句上下」としている。これはおかしい。また、この上下と分けるのも不用なことである。この「章句」は趙岐本の削り残りだろうか。または『四書大全』のときのあやまりであるはずだ。古説にて、『論語』二十篇・『孟子』七篇となっていれば、そのままであるべきだ。『論語』では二篇づつ合せて一巻とし、『孟子』にては一篇を二篇に分けている。『四書大全』においては七篇を偶数の冊に収めるため、上下に分けることもあるだろう。すでに『孟子集註』においては数篇を合せて合巻としている。どうして分けることがあろうか。

十三、『大学』の要点

大学一部十章①ノ眼目、第六章ニアリ。「毋（ナカレ）二自欺（アザムク）一也」「此ヲ之謂二自慊（コヽロヨシト）一」「慎二其独（シム）一也（ヒトリヲ）」「間居シテ為二不善ヲ一」。ミナコレ自カラナスコトニシテ、人ニカヽハラザルナリ。カクノゴトク自カラツヽシム寸ハ、十目十手②ナニヲカ畏（ヲソ）レン。心広体胖（ヒロクタイユタカ）③ニシテ、コノ外ニ労アルベカラズ。ソノ余ハミナコヽニ至ルノ小割（ワリ）ナリ。

【注】

①朱子は『大学章句』をつくって注釈を施し、小学に対応する大学教育の目的と方法を明らかにするにいたった。朱子は『大学』の本文に錯簡誤脱があるとして順序を改め、伝一章を補い、経一章と伝十章とに分け、経は孔子のことばを曾子が記述し、伝は曾子の意見を門人が記録したものとし、これによって孔子―曾子―子思―孟

子―二程子のいわゆる道統論をたてた。朱子の改補した『大学』を新本といい、『礼記』中のものを古本という。なお、小学とは八歳から十四歳にいたる少年を対象とした教育をいい、そのための教育書を『小学』という。この書は旧本では朱子の編とされるが、実は朱子の友人の劉子澄が朱子から委嘱されて編集したもので、一一八七年に完成した。

②『大学』伝六章に「十目所視十手所指（十目の視る所、十手の指す所）」とある。多くの人の目が見、手が指さす対象の意で、多くの人の目からは不正や邪悪はかくしようがないこと。

③『大学』伝六章に「心広体胖、故君子必誠其意（心広く体胖、故に君子必ず其の意を誠にす）」とある。

【現代語訳】

『大学』の経一部伝十章の要点は、伝の第六章にある。「自ら欺く毋かれ（自分で自分をごまかさない）」「此をこれ自ら慊（こころよ）しと謂う（自分で自分を満足させるということである）」「（君子は）其の独りを慎む（自分だけにしかわからない境地で謹慎する）」「（小人は）閒居して不善を為す（だれにもわからない所にいると悪事を働く）」。どれも自分からすることであって、人の力に関わらないことである。このように自分を慎むときは、十目十手もなにを恐れることがあろうか。心が広く体がのびやかになり、このほかに骨折ることはあるはずがない。その余のことはみなここに至るための小さな部分である。

十四、『論語集註』序の程子の言葉

「読ム論語ヲ有下読了テ後、知好ム之者ヲ上①」ヲ道春点②ニ「知ルレ好ムコト之ヲ者」トス。シカルニコノ語「知レ之者、不レ如カニ好レ之ヲ者一ニ。好ムレ之ヲ者ハ、不レ如カニ楽レ之ヲ者一③」ヨリ出（イツ）。「楽ムレ之者ハ、不レ知ラ二手之舞レ之足之　踏ムコト一レ之ヲ者也④」。然レバ「知ルレ之ヲ者、好ムレ之ヲ者」ト分チ云ベキヲ、略シテ「知ニ好ム之ヲ一者」ト云タルナリ。知好ノ間ニ之ノ字アレバ紛ハシキコトナシ。コノ文、知・好・楽ノ三ツヲ云ニ、知好ニタヽミテ、楽ノ処ヲ手ノマヒ足ノフムヲ以テ永クノバシテ云コト、文法ニテハ面白キ文ナリ。シカルニ道春ノ通ニテハ味（アジハ）ヒナシ。

【注】

①『論語集註』序に引く程子曰の文。

②林羅山の訓点。道春は羅山の僧号。

③『論語』雍也篇。

④『詩経』大序の語句「情動於中、而形於言。言之不足、故嗟歎之。嗟歎之不足、故永歌之。永歌之不足、不知手之舞之足之踏之也（情、中に動きて、言に形わる。言の足らざる、故に之を嗟歎す。嗟歎の足らざる、故に之を永歌す。永歌の足らざる、手の之を舞い、足の之を踏むを知らざるなり）」に基づく。ほぼ同一の文が『礼記』楽記篇にあり、また『孟子』離婁上に「楽則生矣。生則悪可已也。悪可已則不知足之踏之手之舞之（楽則ち生ず。生ずれば則ち悪　已むべし。悪　已むべくんば、則ち足の之を踏み手の之を舞うを知らず）」とある。

【現代語訳】

「論語を読み、読み了（おわ）りて後、之を知り好む者有り」を道春点では「之を知る者は之を好むを知る者」としている。しかし、この語は「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず」から出ている。「之を楽しむ者は、手の之を舞い、足の之を踏むを知らざる者なり」ともいう。それならば「之を知る者、之を好む者」と分けていうべきであるのを、略して「之を知り好む者」といったのである。知と好の間に「之」の字があれば紛わしいことがなくなる。この文、知・好・楽の三つを言うのに、「知り好む」とたたみこんで、楽のところを「手の舞い足の踏む」と長く延ばして言うことは、文の作り方としておもしろい文である。しかし、道春点のとおりでは味わいがない。

十五、『中庸』の構成

中庸ノ書ハ、初ニ天命ヲ云ニ、中和ヨリ中庸ヲ解釈シ、知・仁・勇ヲ説出シ、三徳ヲ以テ言（コトハ）ヲ立。ユヘニソノ対（つい）、多クハ三ナリ。ミナ知・仁・勇ソノ中ニアリ。次ニ費隠①ヨリ大孝ヲ云、ソレヨリ天下国家ヲ治ムルノ道ヲトキ、誠ニ帰シテ至誠ノ道ヲ云、ツイニ篤恭シテ天下平ルニ至リテ止ム。初メ天命ヲ受テ生ル、ヨリ始終（シシウ）本末（ホンマツ）通徹（ツウテツ）シテ、ソノ説ミナ親切著明（シンセツチョメイ）、天下平ナルノ極切②ニ至リテ終ル。至ル哉。

【注】

①『中庸章句』第十二章に「君子之道、費而隠」とある。費はわかりやすい、隠はわかりにくい。君子の道は身近なものから始まり、わかりやすいが、また奥深く容易に知り得ないものでもあるということ。

②底本では「極切」となっているが、これは「極功」が正しい。『中庸』の末尾「篤恭而天下平」の朱注に「中

庸之極功也」とある。

【現代語訳】

『中庸』の書は、初めに「天命」をいい、次に「中和」、そして「中庸」を解釈し、「知・仁・勇」を説き、これを「三徳」とした。だから、その対偶はたいてい三句からなっていて、どれも「知・仁・勇」がその中に含まれている。次に「費隠」より「大孝」について述べ、それから天下国家を治める道を説き、「誠」に帰着して「至誠」の道をいい、最終的に「篤恭にして天下平なり」に至って終わる。初め天命を受けて生まれるより、始終本末徹底していて、その説はみなぴったり当てはまり明らかで、天下平なるの究極の効果に至って終る。至上のものといえよう。

十六、『中庸』は知を尊ぶ

中庸ハ知ヲ尚(タフト)ブ。堯舜スデニ仁アリテ、其済(スク)フノヒロキヲ欲(ホッス)。コレヲ行フモノハ知ナリ。ユヘニ知ヲ重シトス。論語ニハ、仁者ヲ上トシ、知者ヲ次トス①。コレハソノ徳ノ優劣(ユウレツ)ヲ云ナリ。中庸ニハ、聖人ノ身ノ上ニテ元ヨリ仁アレドモ、知ヒロカラサレバ行ヒガタシ、ユヘニ知ヲ貴ブ也。費隠②ハ大小顕微(ケンビ)ヲカ子(ね)ツ、ミテ云。シカルニ次ニ云ゴトク、鬼神ノ章③ヲ二十四章ヘヲクル寸(とき)ハ④、朱註⑤ノゴトク費隠ヲクルシミ解クニ及バズ。

【注】

①『論語』里仁篇に「仁者安仁、知者利仁（仁者は仁に安んじ、知者は仁を利とす）」とある。

②十五の注①参照。

③『中庸章句』第十六章「子曰、鬼神之為徳、其盛矣乎。～誠之不可揜、如此夫。」

④鬼神の働きの盛大微妙を述べて「誠」の偉大な徳の形容としているが、前後の文章との連続が悪く、「誠」がここに出てくるのも唐突である。注②にあげた「君子之道、費而隠」から始まる第十二章から「鬼神」の直前の第十五章の論旨は「君子のふみ行うべき道は、わかりやすくて明白であると同時に奥深くてわかりにくい。その始まりは身近なものであるが、その究極は天地の果てまでも広くゆきわたっている。平凡な日常の徳を実行し、足りないところを補うために努力し、過ぎたところを抑制する。君子は自分の境遇に適応した行動をとり、自分の道を守る」というものである。「鬼神」の一段を、懐徳堂学派では錯簡とみて、第二十四章の「至誠之道、可

以前知～故至誠如神」の一段の次に移して読むとする。⑤朱子は体用論に引き当てて、費を作用、隠を本体のこととする（朱註「費、用之広也。隠、体之微也。」）

【現代語訳】

『中庸』は知を尊重する。堯舜はすでに仁を備えていて、民を広く救いたいと望んだ。これを行うのは知である。だから知を重視した。『論語』では、仁者を上位とし、知者をその下と見なしている。これは、その徳の優劣をいっているのである。『中庸』においては、聖人の身の上であればもともと仁があるが、知が広くなければ実行するのはむずかしい、だから知を尊重するのである。

『中庸章句』十二章の「費隠」とは、（君子の道が）大小となく、目に明らかに見えるものも、隠れてよく見えないものをも包括することを言う。だから、次（十八）にいうように、『中庸章句』十六章にある「鬼神」の章を二十四章へ移したならば、朱註のように「費隠」の解釈に苦しむことはないのである。

十七、武王の寿命

「武王末受レ命ヲ①」、朱註「末ニ猶老也」ト云。コレハ文王世子篇②ニ文王ノ夢バナシヲ云テ、「我百ニシテ死セン、女九十ニシテ死セン。今女ニ三ヲアタヘン。文王九十七ニシテ崩ジ、武王九十三ニシテ崩ズ」トアルヲ信シテ、武王九十三ニシテ崩ズレバ、成王ソノトキ幼トアル③ユヘ、武王八十有余ノ寸ノ子トミタルナリ。ユヘニ末ノ字ヲ老ノコトシト云。文王何ホドノ聖知トイヘドモ人ノ寿ヲシランヤ。又我齢ヲ人ニアトフルコトアランヤ。一日半時モナラザルコトナリ。況ヤ三年ヲヤ。武王ノ孝ニシテ、父ノ齢ヲチヾメテ我ニ増ス。天下ノ不孝コレヨリ大ナルハナカルベシ。コレヲ以テ古書ノ妄誕ヲシルベシ。シカルニ朱子モコノコトヲ信ズルニハアラ子トモ、文王九十七・武王九十三ノコトハ実ナルベシトス。ユヘニコノ論アルモノナラン。史記④モ亦コレニヨル也。イツレニモ武王四五十歳ノ間ニ命ヲ受テ王トナリタルナラン。末ト云ハ、在位及年号ニ初・中・末ヲ云ゴトク、武王一生五六十年ノ末ニト云コトナリ。老ニアラザルベシ。何ニモセヨ武王ハ五六十歳ニシテ崩ズルナラン。ソノユヘハ、武王殷ヲ伐テ間モナク崩ズ。ソノトキ適子⑤成王幼ナルユヘニ周公⑥政ヲ摂ス。コノ時成王ノ弟多クアリ。武王九十三ニシテ崩ズルナラバ、其弟周・召ノ二公⑦、管・蔡ノ二叔⑧トモニ七八十歳ナルベシ。成王ヲ十歳バカリトミレバ、八十歳余ノ子ナリ。杞ノ大姫⑨ト云ハ、

大姫トアレバ適女(テキジョ)ナリ。イマダ嫁セザレバコレモ亦二十ニミタザルベシ。シカレバ七十ノコロノ子ナリ。武王七十マデ子ナクシテ、ソレヨリ大姫・成王ヲハジメ、叔虞(グ)⑩ヨリ多クノ子俄(ニハカ)ニ出生シタルコトイブカシカラズヤ。シカルニ文王ノ百年ハ孟子⑪ニ証アレバ疑ナシトイヘドモ、武王ノ九十三ハ疑フベシ。ユヘニコノ章ノ末ハ武王一生ノ末トシ、武王ハ五六十歳ノ崩トシルベシ。

【注】

①『中庸』の文。武王は文王の子。殷王を破り周王となった。

②『礼記』文王世子篇をいう。以下の話は原文では次の通り。「文王謂武王曰、女何夢矣。武王対曰、夢帝与我九齢。文王曰、女以為何也。武王曰、西方有九国焉。君王其終撫諸。文王曰、非也。古者謂年齢、歯亦齢也。我百、爾九十。吾与爾三焉。文王九十七乃終、武王九十三而終（文王、武王に謂ひて曰く、女何(なんぞ)をか夢む、と。武王対(こた)へて曰く、夢むらく、帝、我に九齢を与ふ、と。文王曰く、女以て何と為すや、と。武王曰く、西方に九国有り。君王　其れ終(つひ)にこれを撫(ぶ)せん、と。文王曰く、非なり。古者(いにしへ)は年を齢(よはひ)と謂ふ。歯(し)も亦た齢なり。我は百、爾は九十。吾　爾に三を与ふ、と。文王は九十七にして乃ち終り、武王は九十三にして終る）」

③成王は武王の子。注②の『礼記』文王世子篇の続きに「成王幼不能涖阼（成王幼くして阼(そ)に涖(のぞ)むこと能はず）」とある。

④周本紀「西伯崩」の集解（裴駰）に「徐廣曰、文王九十七乃崩」とある。

⑤嫡子。

⑥武王の弟。武王の子の成王を助けて周王朝の基礎を作ったとされる。

⑦周公と召公。武王の弟。

⑧管叔と蔡叔。周公旦の弟。乱を起こして殺された。

⑨武王の娘（出典不明）。

⑩成王の弟、唐叔虞。晋の始祖。

⑪『孟子』公孫丑上に文王は「百年而後崩」とある。

【現代語訳】

『中庸』「武王末に命を受く」の朱註には「末は猶ほ老のごとし」という。これは『礼記』文王世子篇の文王の夢話に基づく。そこでは文王が武王に「私は百歳で死ぬだろう、そなたは九十歳で死ぬだろう。今、（私の寿命から）そなたに三年の命を与えよう」と言ったが、果たして文王は九十七歳で崩じ、武王は九十三歳で崩じたと

ある。これを信じたとして、武王が九十三歳で崩じたのであれば、成王はそのとき幼かったとあるから、武王が八十歳余りの時の子とみられる。だから「末」の字を「老」と同じというのである。

文王がいかに聖知であるといっても人の寿命を知っているのだろうか。また自分の年齢を人に与えることがありうるだろうか。たとえ一日や半時であってもできないことである。まして三年もというのは無理なこと。また親孝行な武王が、父の年齢を縮めて自分に加えた。天下でこれより不孝なことはない。このことから昔の書物がでたらめであることがわかる。

しかし、朱子もこのことを信じているのではないけれど、文王が九十七歳、武王が九十三歳ということは事実であるとしている。だから、この論（「末は猶ほ老のごとし」）があるのだろう。『史記』もこの（文王世子篇の）説に拠っている。

いずれにしても、武王は四五十歳の間に天命を受けて王となったのであろう。「末」というのは、在位や年号に初・中・末をいうように、武王の一生五六十年の末にということである。「老」ではないだろう。いずれにせよ、武王は五六十歳で崩御したと思われる。そのわけは、武王は殷を伐ってまもなく崩じた。そのとき嫡子の成王は幼なかったために周公が摂政になった。この時、成王の弟が多くいた。武王が九十三で崩じたのであるなら、武王の弟の周公・召公、管叔・蔡叔はともに七八十歳であったはずである。成王が十歳ほどであったとすれば、武王の八十歳余りの時の子である。武王の娘の杞の大姫という人は、大姫とあるから長女である。まだ未婚であったから、二十歳未満のはずである。そうすると七十歳のころの子である。武王が七十歳まで子がなくて、それから大姫や成王をはじめとして、成王の弟の叔虞以降の多くの子が急に出生したのは、あやしくはないだろうか。

そういうわけで、文王の寿命が百年であったことは『孟子』に書かれてあるから疑いないとしても、武王の九十三歳というのは疑うべきである。だから、この章の「末」は武王一生の末とみなし、武王は五六十歳に崩じたと知るべきである。

十八、『中庸章句』鬼神の章について

鬼神ノ章①、十六章ニアルハ錯簡（サクカン）②ナリ。コノ書首尾連続（レンゾク）スルコト至リテ正シ。然ルニコノ章上下ニツラナラズ。ユヘニ朱子、費隠（ヒイン）③ヨリシテサマザマニ説（トキ）ナストイヘドモ穏（ヨダヤカ）ナラズ。仁斉（ママ）先生コノ章ヲ以テ、「上

受ル所ナク、下起ス処ナシ」④ト、始テ疑ヲ入トイベトモ、其説ヲ得ズ。万年三宅先生ノ卓見⑤ニテ、コノ章ヲ二十四章トスレバ、前後ヨク連続ストアリショリ、五井ノ二先生⑥コレヲトナヘテ、今ノ竹山・履軒両先生ニ至リテソノ説備ハル⑦。右鬼神ノ章ヲノゾケバ、十五章ノ「父母ハ其順ナル也乎」ヨリ十七章ノ「舜其大孝也」カヘウケテ、ダンダン武王・周公ノ孝ニウツル。コレヨリヲイグリテ二十四章ハ二十三章トナル。「至誠如レ神⑧」ヨリ十六章ヲコノ処ヘ［入テ］「鬼神之為レ徳、其盛也乎」ヘウツリ、末ノ「誠之不レ可レ揜如レ此乎」ヨリ二十五章ノ「誠ハ自ラ成ス也、道ハ自ラ道ビク也⑨」トウクレバ、始終本末カ子ソナハリテ又遺憾ナシ。ソノウヘコノ書、前ニ論ズルゴトク、天命ヨリ中庸ヨリツイニ誠ニ成就ス。誠ハ此書ノ総紐⑩ナリ。シカルニ十六章ニ誠ノ字出テ、二十五章マデ出ザルユヘニ⑪コノ一篇穏ナラズ。今カクノゴトク入カヘル寸ハ、誠ノ字初テ二十四章出テ、ソレヨリ誠ヲクリカヘシクリカヘシテツイニ「無声無臭⑫」［ニ］至ルモノ、中庸ノ本意、脈絡貫通ス。千載ノ一快ト云ヘシ。ソノ余ハ竹山先生ノ定本ニ精シケレバ、コヽニ略ス。

【注】

①『中庸章句』第十六章は「子曰、鬼神之為徳」で始まっている。

②昔、木や竹のふだ（簡）に字を書いて書物としていたが、ふだの順序が乱れて、書物の文章の順序が入れ違っていること。

③『中庸章句』第十二章「君子之道、費而隠」（十五・十六に既出）。

④伊藤仁斎『中庸発揮』下。

⑤万年は懐徳堂初代学主三宅石庵の別号。三宅石庵が唱えた説を中井竹山が補って手写した『中庸錯簡説』が懐徳堂文庫に残る。

⑥岩波本では「五井・中井ノ二先生」とする。意を汲み取って書き換えたか。底本通りの「五井ノ二先生」ならば五井持軒とその子の蘭洲になる。持軒は大坂の儒者で三宅石庵と親交があった。蘭洲は懐徳堂初代学主三宅石庵・二代学主中井甃庵・三代学主三宅春楼を支え、懐徳堂の教育を朱子学に導いた人物。中井竹山・履軒の師。「五井・中井ノ二先生」ならば蘭洲と中井甃庵。甃庵は懐徳堂第二代学主で、中井竹山・履軒の父。三宅石庵の創案を受け継いで竹山・履軒につなぐとなれば、五井蘭洲と中井甃庵を指すと考えられる。

⑦中井竹山は『中庸懐徳堂定本』を、履軒は『中庸天楽楼定本』を書いている。
⑧『中庸章句』二十四章の最後の句。
⑨二十五章の句は正しくは「誠者自成也、而道自道也」である。
⑩中核。総括。
⑪実は二十章に有名な「誠者天之道也」など「誠」の字が多く見られる。以下、各章に「誠」は述べられている。ここは蟠桃の思い違いか。
⑫『中庸章句』の最終章三十三章は「詩曰、德輶如毛、毛猶有倫、上天之載、無声無臭、至矣（詩に曰く「徳の輶（かる）きこと毛の如し」と。毛は猶ほ倫（たぐひ）有り。「上天の載（こと）は、声も無く臭も無し」と。至れるかな）」で終わっている。「德輶如毛」は『詩経』大雅・烝民の句。徳は毛のように軽妙が、だれも持ち上げる民はないと続く。「上天之載、無声無臭」は『詩経』大雅・文王の句。地の文として用いたと思われる。

【現代語訳】

『中庸章句』で鬼神の章が十六章にあるのは錯簡（入れちがい）である。この『中庸』は文章の趣旨が首尾一貫することが正確に守られている。しかしながら、この章は上下の文章とつながらない。だから朱子は、（さかのぼって十二章の）「費隠」の語から以後、様々に説明しているが穏当ではない。仁斎先生はこの章を、「上の文意を受ける所がなく、下の文意を起こす所もない」と、始めて疑問を提示したが、その説明はできなかった。三宅万年先生の卓見によって、この章を二十四章として入れ替えれば前後がよく連続するとされてから、五井蘭洲と中井甃庵の二先生もこれを唱えて、今の竹山・履軒両先生に至ってその説が整った。

右の鬼神の章を除くと、十五章の「父母ハ其順（ソレ）ナル也乎」より十七章の「舜其大孝也」につながり、次第に武王・周公の孝に移っていく。ここから順に繰り上げて二十四章は二十三章となる。（二十四章の）「至誠如神（至誠神の如し）」より以後に十六章をここに入れて「鬼神之為德、其盛乎（鬼神の徳為るや、其れ盛んなるかな）」と続けて、（十六章の）末句の「誠之不可揜如此夫（誠の揜（おほ）ふべからざる此くの如きかな）」から二十五章の「誠者自成也、而道自道也（誠は自ら成るなり、而して道は自ら道（みちび）くなり）」に続けば、文意が一貫して通じ、遺憾ないものになる。

その上、この書は、前に論じたように、「天命」から「中庸」、そして「誠」にて完成する。「誠」はこの書の中核

である。しかし、十六章に「誠」の字が出て、二十五章まで出ないため、（もともと）この（十六章という）一篇は問題があった。今、このように入れ替えれば、「誠」の字は初めて二十四章に出て、それ以後、誠を繰り返して、ついに「無声無臭」に至って、『中庸』の本意は脈絡が貫通するのである。（十六章の「鬼神」の章を二十四章とすることは）千載の一快というべきである。その余は竹山先生の定本に詳しいので、ここでは省略する。

十九、「哀公問政」

「哀公問レフノ政ヲ①」章、説者云、「家語②ヨリ出ス」ト。シカルニ家語ノ書疑フベキコト多シ。擬作③ナルコト顕然タリ。家語コノ一章ヲノゾキテ見ル寸ハ取ルベキコトナシ。ソノ余ミナ聖人ヲ奇怪ニ云ナシ、妄説・杜撰冊ニアブル。コノ一章ニカギリテ卓然トシテ家語中ノ善美アツマル。コレヲ以テミレバ中庸ハ元ニシテ家語ヘヌキ出シタルコトシルベシ。コノ書ノ本末備リタルト家語ノ妄作ト、ソノ黒白自カラ分明ナリ。

【注】

①『中庸章句』第二十章。

②『孔子家語』。魏の王肅の偽作。「哀公問政」は巻四。

③『論語』になぞらえて作ったと見られることから、「擬作」という。

【現代語訳】

『中庸』の「哀公問政」の章を、「『孔子家語』から出た」という者がいる。しかし、『孔子家語』は疑うべきことが多い。擬作であることは明らかである。『孔子家語』は、この一章を除くと、あとは見るべきものがない。その他の所では、すべて聖人孔子を奇怪なものとして述べていて、妄説や杜撰な説があふれている。この一章だけはぬきんでていて、『孔子家語』の中のよいところがここに集まっている。このことから考えると、『中庸』が元になっていて『孔子家語』が抜き出したことがわかる。『中庸』が全文趣旨が備っていることと、『孔子家語』の妄語と、その黒白は自然にあきらかである。